

## 第 86 回 歴史探訪の会「平群谷歴史散策・長屋王と吉備内親王の史跡巡り」

日時:令和 5 年 3 月 15 日  
場所:奈良県生駒郡平群町  
世話人:田原 誠也

### コース&見所 (歩程約 6 km)

近鉄生駒線・元山上口駅(集合)～道標・ビューポイント(信貴山)～平群坐紀氏神社～吉備内親王の墓～長屋王の墓(トイレ休憩)～長楽寺・鑑み石～平群中央公園(昼食休憩)～西宮古墳～平群神社～竜田川桜並木～近鉄生駒線・平群駅(解散) 案内は平群町観光ボランティアガイド 3名(小松・長尾・田中)

### 見所

道標(石灯籠)・ビューポイント(葛城山・二上山・明神山・信貴山・生駒山)



道標(石灯籠)



平群谷の歴史を熱心に聞いている



生駒山上の各 TV 局の電波塔

### 平群坐紀氏神社(紀氏神社)

祭神は 4 柱・天照大神・天兒屋根命・都久宿禰(平群木菟宿禰)・八幡大菩薩

『延喜式』神名帳における祭神の記載は 1 座。同帳では「平群坐紀氏神社」と記載されるが、この社名は「平群(地名)に鎮座する紀氏神の社」という意味で、元々は紀氏(きうじ/きし)の氏神を祀る神社であったことが知られる。紀氏には神別の紀氏(紀直のち紀宿禰、紀伊国名草郡の紀伊国造り氏族)と皇別の紀氏(紀臣のち紀朝臣、中央氏族)の 2 系統が存在するが、当社を奉斎したのは後者の一族(皇別紀氏)になる。

経緯は詳らかでないが平群谷では紀氏の集住が認められており、当社はその氏神として祀られたとされる。

付近に所在する三里古墳(平群町三里)には和歌山県紀の川下流域に多く分布する石棚付石室が認められており、当社と合わせて紀氏との関連性が指摘される。創建は不詳。紀氏神については、『類聚国史』において天長元年(824 年)8 月 21 日に紀百継ツナグ景紀百継・紀末成らの奏聞で「紀氏神」が幣帛の例に預かった旨が見える。延長 5 年(927 年)成立の『延喜式』神名帳では大和国平群郡に「平群坐紀氏神社 名神大 月次新嘗」と記載され、名神大社に列するとともに、朝廷の月次祭・新嘗祭では幣帛に預かる旨が記載されている。

近世には「辻の宮」または「椿の宮」とも俗称された。また江戸時代初期の石灯籠には「春日大明神」と見える。

明治維新後、明治 6 年(1873 年)に近代社格制度において村社に列している。



紀氏神社



皆さん熱心に説明を聞いている・・・



## 長屋王墓&吉備内親王墓

長屋王(ながやおう)

長屋王は、奈良時代前期の皇親・政治家。太政大臣・高市皇子 の長男。官位は正二位・左大臣。皇親勢力の巨頭として政界の重鎮となったが、対立する藤原四兄弟の陰謀といわれる長屋王の変で自殺する。

長屋王の変

奈良時代初期の神亀6年(729年)2月に起きた政変。藤原氏による、皇親の大官である長屋王の排斥事件とされている。

吉備内親王(きびないしんのう)

吉備内親王は、草壁皇子と元明天皇の次女。元正天皇の妹で、文武天皇の姉または妹。長屋王の妃。

長屋王の変で自殺に追い込まれた。

奈良時代の木間の大量発見

1988~1989年の長屋王家木簡と隣接する二条大路木簡をあわせて約11万点見つかリ、其の中でも長屋王家だけで3万5千点もの木簡が見つかリ当時の生活様式等数多くの謎の解明に役に立った?

吉備内親王墓&長屋王墓

長屋王御陵公園で長屋王と吉備内親王、長屋王の変についての説明に皆さん熱心に聞き入っていた。



吉備内親王墓



長屋王墓



長屋王御陵公園

## 長楽寺・鑑み石

長楽寺(ちょうらくじ)

長楽寺は、奈良県平群町にある、真言宗豊山派の寺院。山号は、勝出(かちで)山。本尊は、聖観音立像。

創建は奈良時代。用明天皇二年聖徳太子の建立と伝えられる古刹。もとは、観音堂・文殊堂・毘沙門堂等の寺観が整い多数の支坊もあったが、応永二年、火災のため焼失。現在の本堂は、桃山時代に再興された。

大和北部八十八ヶ所霊場、第四十三番札所。境内に桜の大木があり、開花の時期にはライトアップされる。



長楽寺



勝出山 長楽寺



鑑み石

長楽寺・鑑み石

境内に聖徳太子が腰かけて物部守屋との戦の戦略を練ったと伝わる「鑑み石」が残っている。

平群中央公園(昼食休憩)・西宮古墳の有る丘陵地にある公園。町民憩いの場所で春は桜、秋は紅葉が綺麗。



桜の季節には、未だ早かったが梅の花が未だ残っていた、平群中央公園

## 西宮古墳

奈良県北西部、平群谷の廿日山丘陵の南側斜面に築造された古墳である。

古くより石室が開口し、これまでに数次の調査が実施されている。

墳形は方形で、一辺約 35.6 メートル・高さ約 7.2 メートル以上(南側)を測る(推定復元高さ約 8 メートル)。墳丘は 3 段築成で、墳丘斜面は約 35 度の勾配を持つ。墳丘表面では全面に貼石が認められ、貼石の下には約 40 センチメートルの裏込め礫層が認められるが、埴輪は認められていない<sup>1)</sup>。また墳丘周囲には周溝が巡らされ、東側周溝底にも貼石が認められる。埋葬施設は両袖式横穴式石室で、南方に開口する。巨石の切石を用いた整美な石室であり、内部には兵庫県加古川流域産の成層(竜山石)製の刳抜式家形石棺が据えられる。副葬品は失われているが、調査において須恵器坏蓋・高坏が出土している。この西宮古墳は、古墳時代終末期の7世紀中葉-後半頃の築造と推定される。平群谷では代表的な終末期古墳として注目される古墳である。被葬者は明らかでないが、古墳の規模・内容から厩戸皇子(聖徳太子)の子の山背大兄王の墓とする説が挙げられており、南 1 キロメートルでは厩戸皇子の離宮と推測される西宮遺跡も知られる。



西宮古墳の説明に聞き入る



古墳の石室に入って

## 平群神社（へぐりじんじや）

平群神社は、奈良県 生駒郡 平群町 西宮にある 神社。式内社（大社）で、旧社格 は 村社。

俗称は「西宮」。現在の祭神は大山祇神。延長5年（927年）成立の『延喜式』神名帳 での祭神の記載は5座。元々は古代氏族の 平群氏 の祖神を祀ったとされる。

創建は不詳。延長5年（927年）成立の『延喜式』神名帳では、大和国平群郡に「平群神社五座 並大 月次新嘗」と記載され、5座が式内大社に列するとともに朝廷の月次祭・新嘗祭では幣帛に預かる旨が定められている。

近世には「春日大明神」と称された。また境内には神宮寺として竜花山西宮密寺があったが、神仏分離で廃絶して社務所となっている。

明治維新後、近代社格制度では村社に列している。



平群神社

竜田川沿いの桜並木



平群神社での集合写真

## 付録 : 平群谷の歴史・その他

**平群氏(へぐりうじ)**は、「平群」を氏の名とする氏族。

武内宿禰の後裔と伝えられ、大和国平群郡平群郷(現在の奈良県平群町)を本拠地とした古代在地豪族の一つ。姓は臣(おみ)、後に朝臣。平群木菟(へぐり の つく)は、記紀等に伝わる古代日本の人物。

『日本書紀』では「平群木菟宿禰(へぐりのつくのすくね)」「木菟宿禰」、『古事記』では「平群都久宿禰」、他文献では「都久足尼」とも表記される。「宿禰」は尊称。

『日本書紀』仁徳天皇元年正月3日条では、武内宿禰の子とする。『古事記』孝元天皇段では、建内宿禰(武内宿禰)の子7男2女のうちの第4子として記載されている。

武内宿禰→平群木菟宿禰→真鳥(まとり)→鮪(しび)→(2代略)→神手(かむて)は物部守屋討伐軍に加わる

**平群真鳥(へぐり の まとり、生年不詳 -498年)**

雄略・清寧・顕宗・仁賢朝の大臣。父は平群木菟。子に平群鮪がいる。雄略天皇の御世に大臣となり、平群氏の全盛期を迎えさせる。仁賢天皇の没後、自ら大王になろうとしたが、これに不満を抱いた大伴金村は小泊瀬稚鷦鷯尊(後の武烈天皇)の命令を受け平群真鳥を討ち、真鳥は自害し平群本宗家の一部は滅んだ(生存説有)。

**平群鮪(へぐり の しび)**

鮪は平群真鳥の子で、小泊瀬稚鷦鷯尊((後の武烈天皇)との影姫(物部麁鹿火の娘)を懸けての決闘が『日本書紀』に記されている。鮪の父である真鳥は国政をほしいままにし、皇室のためと偽って自らの邸宅を造営するなど、日本の王になろうと画策していた。

**稚鷦鷯太子(後の武烈天皇) 武烈天皇(第25代天皇)**

皇太子は、物部麁鹿火の娘の影姫(かげひめ)との婚約を試みるが、影媛は既に真鳥大臣の子の平群鮪(へぐりのしび)と通じていた。海柘榴市(つばいち、現桜井市)の歌垣において鮪との歌合戦に敗れた太子は怒り、大伴金村をして鮪を乃樂山(ならやま、現奈良市)に誅殺させ、11月には真鳥大臣をも討伐させた。そののち同年12月に即位して、箔瀬列城に都を定め、大伴金村を大連とした。

皇太子は、物部麁鹿火の娘の影姫(かげひめ)との婚約を試みるが、影媛は既に真鳥大臣の子の平群鮪(へぐりのしび)と通じていた。海柘榴市(つばいち、現桜井市)の歌垣において鮪との歌合戦に敗れた太子は怒り、大伴金村をして鮪を乃樂山(ならやま、現奈良市)に誅殺させ、11月には真鳥大臣をも討伐させた。そののち同年12月に即位して、箔瀬列城に都を定め、大伴金村を大連とした。

**藤原四兄弟(ふじわらしきょうだい、ふじわらよんきょうだい)**

奈良時代前半の天平年間に政権を握った藤原不比等の4人の息子を指す歴史用語。

藤原四子(ふじわらしし、ふじわらよんし)等とも呼ばれる。

・藤原武智麻呂 ・藤原房前 ・藤原宇合 ・藤原麻呂

武智麻呂・房前・宇合は同母兄弟、麻呂は3人の異母弟である。なお、聖武天皇の母の藤原宮子と聖武皇后の藤原光明子はともに四兄弟の異母姉妹にあたる。

**藤原四子政権**

律令編纂や平城京遷都などに関わった不比等亡き後、四兄弟は元正天皇・聖武天皇の時代にわたり長屋王と政権の座を争ったが、長屋王の変で長屋王を追い落とした後、すでに公卿となっていた武智麻呂(大納言)・房前(参議)に加え、官人の推挙により宇合・麻呂も参議となり、9人の公卿のうち4人を占め、729年から737年までの間朝廷の政治を担った。これを藤原四子政権と呼ぶ。

四兄弟は737年の天然痘の流行(天平の疫病大流行)により相次いで病死し、藤原四子政権は終焉を迎えた。その後、四兄弟の子が若かったため、政権は光明皇后(不比等の娘)の異父兄弟で臣降下籍した橘諸兄(葛城王)が右大臣として担うことになった。その後は、四兄弟のうち宇合の息子広嗣が740年に乱を起こし討伐された(藤原広嗣の乱)こともあり、孝謙朝に武智麻呂の子豊成、次いで仲麻呂が台頭するまで、藤原氏の大臣の不在時代がしばらく続くことになる。

他スナップ休憩食屋



写真は岸場さん提供、岸場さん有難う御座いました。